

中野高柳遺跡

平成16年度発掘調査 現地説明会資料



調査区全景(北西から 手前が屋敷Bと屋敷F)

平成16年10月24日(日) 10時30分～

宮城県教育委員会

調査要項

- (1) 遺跡名 なかのたかやなぎ 中野高柳遺跡 (宮城県遺跡登録番号 01146)
- (2) 遺跡記号 K X
- (3) 所在地 宮城県仙台市宮城野区福室字県道前ほか (旧地名 : 中野字高柳)
- (4) 調査面積 約7,800㎡
- (5) 調査期間 平成16年4月12日～11月5日 (予定)
- (6) 調査担当 宮城県教育庁文化財保護課埋蔵文化財第2班
- (7) 調査担当職員 村田晃一、保原恒雄、白崎恵介

1 .はじめに

なかのたかやなぎ 中野高柳遺跡は仙台市宮城野区福室字県道前にあります。南西800mのところを七北田川が流れ、東は4kmで海岸線にいたります。遺跡は、多賀城市にいだ新田から七北田川に平行して南南東にのびる標高3～4mの自然堤防上しぜんていぼうに立地します。上から見ると北側が広い斧おののような形をしており、規模は最も広い部分で測ると南北400m、東西150mほどで、面積は約5万㎡あります。

本遺跡は仙台港背後地土地区画整理事業の対象地に含まれており、仙台市教育委員会(平成7～9・11・12年度)と宮城県教育委員会(平成6・7・12～16年度)が発掘調査を行っています。今年の調査面積は約7,800㎡で、これに昨年まで調査を終了した面積を加えると、実に遺跡全体の約90%が発掘調査されたこととなります。

その結果、平安時代中頃は広大な面積が畑として利用されており、同時代の末期以降は江戸時代まで、武士階級の屋敷やその生活を支えた人々の住まいなどで構成される集落が営まれていたことがわかりました。また、屋敷を巡る溝や井戸・遺物包含層(= ゴミ捨て場)からは、当時の人々が使った焼物や木製や漆塗りの食器、焼物や木製・金属製・石製のさまざまな道具類などが出土しており、これまでよくわからなかった遺跡周辺の平安時代末期から江戸時代の様子がいかに明らかになってきています。



写真1 調査区全景 (北西から 中央奥は仙台港)

2 . 中近世の高砂周辺の様子

集落が営まれた時代のうち、鎌倉・室町時代を中心に遺跡周辺の様子を見てみます。現在の仙台市岩切・高砂から多賀城市・利府町にかけての一带は、鎌倉・南北朝時代には八幡荘・



第1図 中野高柳遺跡と多賀国府（齊藤利男 1992 を一部改変）

南宮荘・田子荘という荘園と高用名と呼ばれた多賀国府の特別行政区に分かれていました。中野高柳遺跡は八幡荘内にあったと考えられます。八幡荘は、現在の宮城野区蒲生・中野から多賀城市八幡にかけての地域が含まれ、中世の文書をみると、荘内には中野・蕨壇・柑子袋・藤木田・萩園郷・蒲生郷という地名があったことがわかります。また、中野は南北朝時代の14世紀中頃、岩切城を居城とした留守氏の当主に抱えられた白拍子（歌や舞いを職業とした女性）が住んでいたところと記されています。

この地を治めていたのは、鎌倉時代が平姓陸奥介氏、南北朝時代以降は平姓八幡介（のちに八幡氏と称す）です。八幡氏は戦国時代に留守氏の家臣となり、八幡荘は留守氏の領地の一部となりました。江戸時代に入り仙台藩が成立すると、その上級家臣である天童氏が八幡、大町氏や畠中氏が中野、和田氏が蒲生に屋敷を構えて支配を行いました。

発掘調査で明らかになった周辺の中世遺跡としては、仙台市岩切城跡、東光寺遺跡、今市遺跡、鴻ノ巣遺跡や洞ノ口遺跡、多賀城市新田遺跡、山王遺跡などがあげられます。このうち鴻ノ巣・洞ノ口・新田・山王遺跡では、本遺跡と同じように大溝や堀で方形に区画された屋敷跡が見つっています。内部には掘立柱建物や塀、井戸などがありました。これらの中には規模が大きく、建物や井戸が立派で茶の湯の道具や高級な焼物が見つかることがあります。こうした屋敷の主は、武士階級であり、戦国時代までに留守氏の家臣になったと考えられていますが、屋敷はいずれも16世紀の終わり頃に廃絶します。その理由は、天正19年（1591）に伊達政宗が岩出山に居城を移した際、留守氏は黒川郡に移転させられ、家臣もこれに従ったためと考えられています。

洞ノ口・鴻ノ巣・今市・新田遺跡では、鎌倉時代から南北朝時代にかけて武士階級の屋敷とともに、それより小規模な屋敷跡が数多く発見されています。このため仙台市岩切から多賀城市新田にかけての地域は、中世の文書にみられる「多賀国府」であるという見方が強まっています。多賀国府は、陸奥国の政治的な中心で役所や役人たちの屋敷や住居があり、西側の丘陵には寺院や神社がつけられました。その一方、河原宿五日市場、冠屋市場という市場が存在した大きな商業地でもありました。当時は、武士や役人、僧侶、商人、職人、旅人など多数の人々でにぎわう都市だったと想像されます。

3. これまでの発掘調査成果

発見された遺構は平安時代から江戸時代にわたり、大きく7期（第1期～第7期）の変遷が認められます。平安時代前半（第1期・第2期）は畑や水田として利用され、同時代の末から江戸時代（第3期～第7期）は大小さまざまな屋敷がつけられたことがわかりました。年代は、第1期が9世紀末から10世紀前葉、第2期が10世紀中葉、第3期が12世紀、第4期が13世紀から14世紀、第5期が15世紀頃、第6期は16世紀頃、第7期が17世紀以降です。資料の最後に年表を付けましたので、それぞれの時期にどのような出来事があったのかについては、そちらを参照して下さい。

【第1期：平安時代前半】

河川が遺跡北部の中央から南部の東縁を南に流れ、南端付近で西に向きを変えています。10世紀前葉にかいはいくしよくかざんばい灰白色火山灰が降下した頃の川幅は36mあり、水の流れも豊かでしたが、火山灰降灰後は河川の氾濫が起こり、幅が14mに縮小したことがわかりました。

第1期の畑跡は、河川両側の高い部分で発見されています。岸に近い



写真2 第1期の畑跡（右下の斜めの溝が区画溝）

ところまで耕作が及んでおり、他の三方は、河川に連結する溝で「コ」の字状に囲まれています。また、遺跡北西部の低い部分では水田跡がみついています。畑は灰白色火山灰が降ったため耕作を中止しています。火山灰は青森県十和田湖の火山から噴出したものですが、そこから約250km離れた本遺跡も災害を受けたことがわかりました。

第 期の畑跡は遺跡北部の河川西側で発見されました。第 期の畑と同じく一方は河川に面し、他の三方は溝で囲まれています。耕作面積は第 期に較べて大きく減少しています（約11,000㎡以上）。畑は、洪水によって耕作を中止しています。

【第 期～第 期：平安時代末～江戸時代】

第 期から第 期（鎌倉時代～江戸時代）は、遺跡内で場所を変えながら屋敷がつくられました。昨年まで溝で方形に区画された屋敷跡を12（A～H）確認しています。**第 期**（平安時代末期）もゴミ捨て場の状況しかわかっていませんが、近くにこの時期の屋敷があったと考えられます。

屋敷A～Hは3mの大溝で囲まれています。屋敷Hを除いて遺跡西側で発見されました。内部からは、建物や井戸、大小さまざまな土坑（＝穴）などが見ついています。施設毎に作られる場所が異なっており、屋敷内の使われ方は固定的かつ継続的でした。敷地の規模や建物配置、出土した遺物からみて、屋敷の主は武士階級と考えられます。以下、第 期から第 期の屋敷跡について概略を説明します。

【第 期】

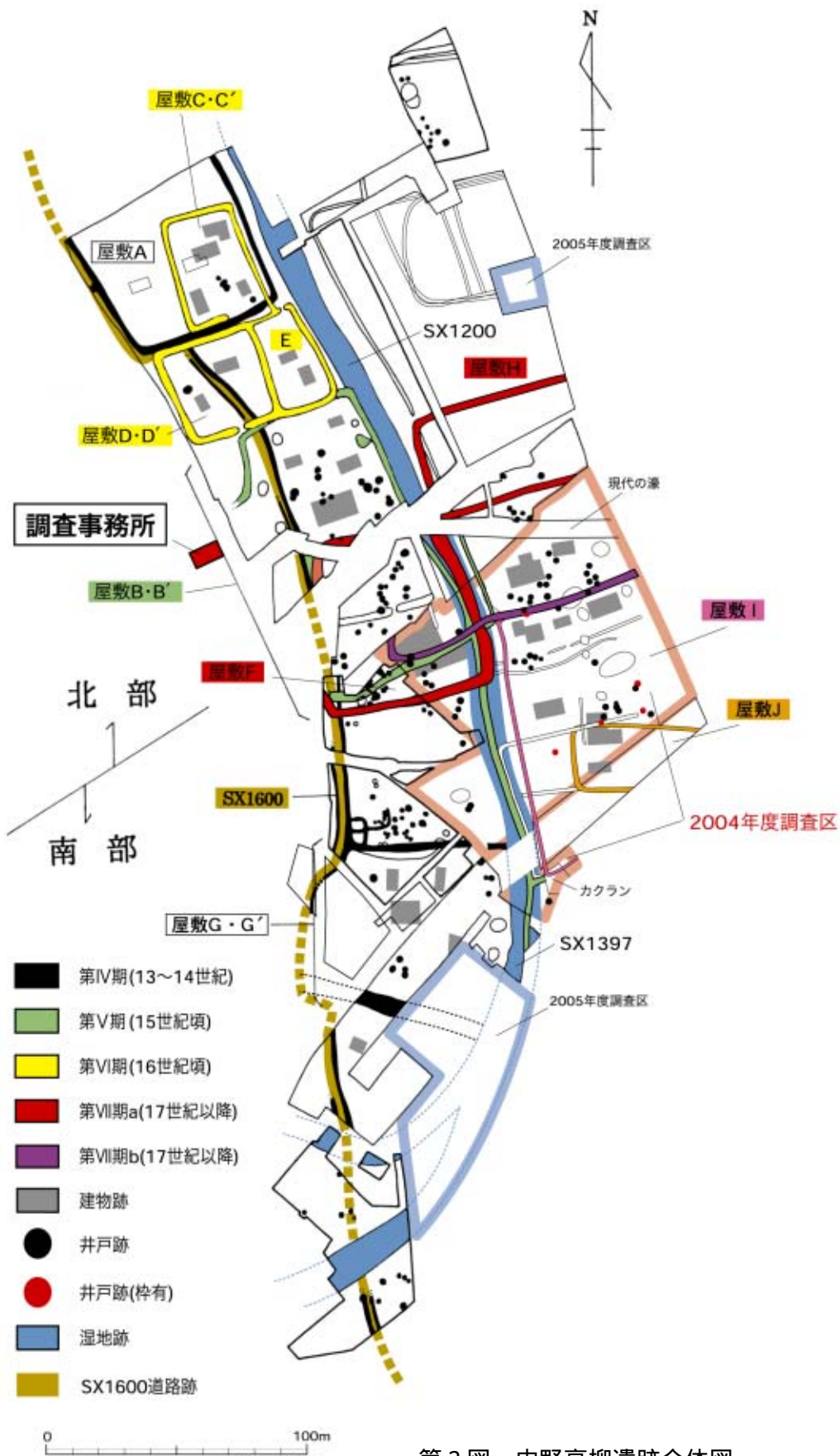
遺跡北端で屋敷A、南部で屋敷G・G を確認しました。両者は南北道路でつながっています。屋敷G・G は東が湿地、西は南北道路東側溝、南北はそれらと接続する幅3mの東



写真3 道路跡（左上は屋敷Gの北西隅）

西大溝で囲まれています。内部は南に広場があり、その北に主屋、東に副屋、主屋北側に附属建物がつくられ、それぞれ何度か建替えられています。井戸は広場や主屋の西側、屋敷の北端にありました。これらはほとんどが素掘りですが、広場で発見された井戸は木枠を持つ立派な作りでした。屋敷の端では、大きな土坑（＝穴）がいくつもみついています。そこからは焼けた土や炭とともに壊れた焼物、道具類が出土しており、ゴミを投げた穴と考えられます。また、湿地もゴミ捨て場となっていました。

屋敷の西を走る道路跡は、幅が3mで遺跡を南北に縦断しています。遺跡の北には、板碑が数箇所確認され、宿在家という地名がみられます。道路は、おそらくこうした場所を通って多賀国府へ続いていたと考えられます。井戸跡や溝跡、大土坑、道路側溝、湿地跡からは、土器・陶磁器・漆製品・木製品・



第2図 中野高柳遺跡全体図

屋敷名	規 模	遺構期	年 代	区画溝	遺跡内の位置
屋敷A	東西 53～62m 南北 58m以上	第 期	13～14 世紀	大溝（幅 3m）	北端部西側
屋敷B	東西 40～50m 南北 105m	第 a 期	15 世紀頃	大溝（幅 3m）	北部～中央部西側
屋敷B	東西 40～50m 南北 105m	第 b 期		大溝（幅 3m）	北部～中央部西側
屋敷C	東西 24～29m 南北 38～40m	第 a 期	16 世紀頃	大溝（幅 3m）	北部西側
屋敷D	東西 32～35m 南北 34～35m			大溝（幅 3m）	北部西側
屋敷C	東西 24～29m 南北 38～40m	第 b 期		大溝（幅 3m）	北部西側
屋敷D	東西 32～35m 南北 34～35m			大溝（幅 3m）	北部西側
屋敷E	東西 16～21m 南北 34～35m			大溝（幅 3m）	北部西側
屋敷F	東西 50m 南北 63m	第 期		17 世紀以降	大溝（幅 3m）
屋敷G	東西 70m前後 南北 50～53m	第 期	13～14 世紀	大溝（幅 3m）	南部西側
屋敷G					
屋敷H	東西 65m以上 南北 35m	第 期	17 世紀以降	大溝（幅 3m）	北部～中央部東側
屋敷I	東西 60m以上 南北 95m	時期不明		溝（幅 1m）	南部東側
屋敷J	東西 30m以上 南北 25m			溝（幅 1m）	南部東側

第 1 表 屋敷の規模

動物の骨・植物の種などが出土しました。

〔第 期〕

遺跡北半から中央部で**屋敷B・B**を確認しました。まわりは幅 3 m の大溝で囲まれており、内部は中央に主屋、その東前面に副屋、主屋北側に付属建物がつくられ、それぞれ何度か建替えられています。井戸は主屋の東に多く分布します。また、屋敷の北や西の端には大きな土坑（ゴミ穴）が掘られました。

井戸跡や溝跡、大土坑から陶磁器・漆製品・木製品・動物の骨・植物の種などが出土しています。しかし、出土量は前の時代に較べて著しく少なくなり、第 期まで続きます。こうした傾向は、宮城県内の同時代の遺跡に共通した現象といえます。

〔第 期〕

遺跡北部で**屋敷C・C'・D・D'・E**を確認しました。屋敷C・Dから屋敷C'・D'・Eへ変遷しており、複数の区画から屋敷が構成されるようになります。その一方、ひとつの屋敷の規模は一辺が20～40mとなり、他の時期が50mあるのに較べて小さくなります。建物規模や屋敷内部の空地の割合に違いがあり、屋敷C・C'に主が住んでいたと考えられます。井戸跡や溝跡、大土坑から陶磁器・漆製品・木製品・動物の骨・植物の種などが少量出土しています。

〔第 期〕

遺跡中央部で**屋敷F**と**屋敷H**を確認しました。両者はまわりを幅 3 m の大溝で囲まれています。屋敷Fの井戸は東端に多くつくられました。北西に屋敷Hが隣接しますが、両者の関係については現在検討中です。

井戸跡や溝跡から土器・陶磁器・漆製品・木製品・動物の骨・植物の種などが出土しています。とくに屋敷を巡る大溝の南東隅付近から多く出土しました。

中野高柳遺跡で発見された第 期から第 期の遺構は、八幡 荘^{やわたのしょう}を治めた武士(平 姓陸奥^{たいらせいむつ}のすけ 氏、八幡氏^{やわた})の屋敷跡とそれにかかわる人々の住まい、第 期は仙台藩成立後、中野を治めた大町氏^{おおまち}や畠中氏^{はたなか}およびその家臣の屋敷跡と考えられます。井戸や大溝、遺物包含層(= ゴミ捨て場)からは、焼物や漆塗りの食器、焼物や木・石・金属で作ったさまざまな道具類が出土しました。これらの中には、香や茶の道具、中国から輸入した高級な焼物もあります。また、遺跡内からは永仁4年(1286)に立てられた板碑^{いたび}と呼ばれる石製の供養塔^{くようとう}が1基見つかっています。

4. 今年度の発掘調査成果

今年度は、遺跡南東部の約7,800㎡について発掘調査を行いました。その結果、第 期の畑跡や河川跡、第 期から第 期の屋敷跡などを発見しました。

【第 期】

畑跡は、河川の両側で見つかっています。畑は、河川に連結する幅1mの溝で三方を「コ」の字状に囲まれた内部につくられています。畝^{うね}は河川に対して直交するようにつくられ、耕作の痕跡は上幅60cm前後、下幅で30cm前後あります。畑の面積は、遺跡全体で25,000㎡を超えますが、



写真4 第 期の畑跡(白く見えるのは河川跡に堆積した灰白色火山灰)

これまでのところ耕作に従事した人々の住まいは発見されていません。

【第 期から第 期】

これまでの調査で確認した屋敷G・G、B・B、Fに加えて屋敷Iと屋敷Jを発見しました。両者を比較すると、屋敷G・G・B・B・Fは、遺跡西側にあり幅3mの大溝で囲まれています。屋敷I・Jは遺跡東側にあり幅1m前後の溝で囲まれています。屋敷I・J内部の大型建物は建替えが少なく、区画の中央に建てられるのではなく、端に寄っています。さらに出土遺物の量も少ないことから、屋敷I・Jは大溝で囲まれた屋敷の主と主従関係にあった人や一般農民、さまざまな道具をこしらえた職人などの住まいとみられます。武士の屋敷(=館)のまわりには、こうした住まいが集まり、両者が一体となって一つの集落を形成したと考えられます。



第3図 漆間時国の屋敷（『法然上人絵伝』より）

中世の^{えまきもの}絵巻物である『^{ほうねんしやうにんえでん}法然上人絵伝』をみると、^{みまさか}美作国の^{うるまときくに}武士漆間時国の屋敷は、方形で周囲に堀を巡らせており、そのまわりには使用人や一般農民の家、畑や水田が描かれています。中野高柳遺跡の鎌倉時代から江戸時代の屋敷とその周囲の光景は、このようなものであったと想像しています。

〔屋敷G・G 〕

第一期の屋敷跡です。東が湿地、西は南北道路東側溝、南北はそれらと接続する幅3mの東西大溝で囲まれています。規模は東西70m前後、南北50～53mで、今年屋敷跡の北東隅付近を確認しました。屋敷東側の湿地は、ゴミ捨て場となっており、土器や陶磁器・木製品・動物の骨・植物の種などが出土しました。

〔屋敷B・B 〕

第一期の屋敷跡です。まわりを幅3mの大溝で囲まれており、規模は東西40～50m、南北105mあります。今年屋敷跡の南東部を調査し、建物や井戸を発見しました。建物は、屋



写真5 屋敷F南東部（手前の大溝から遺物が多く出土しました）

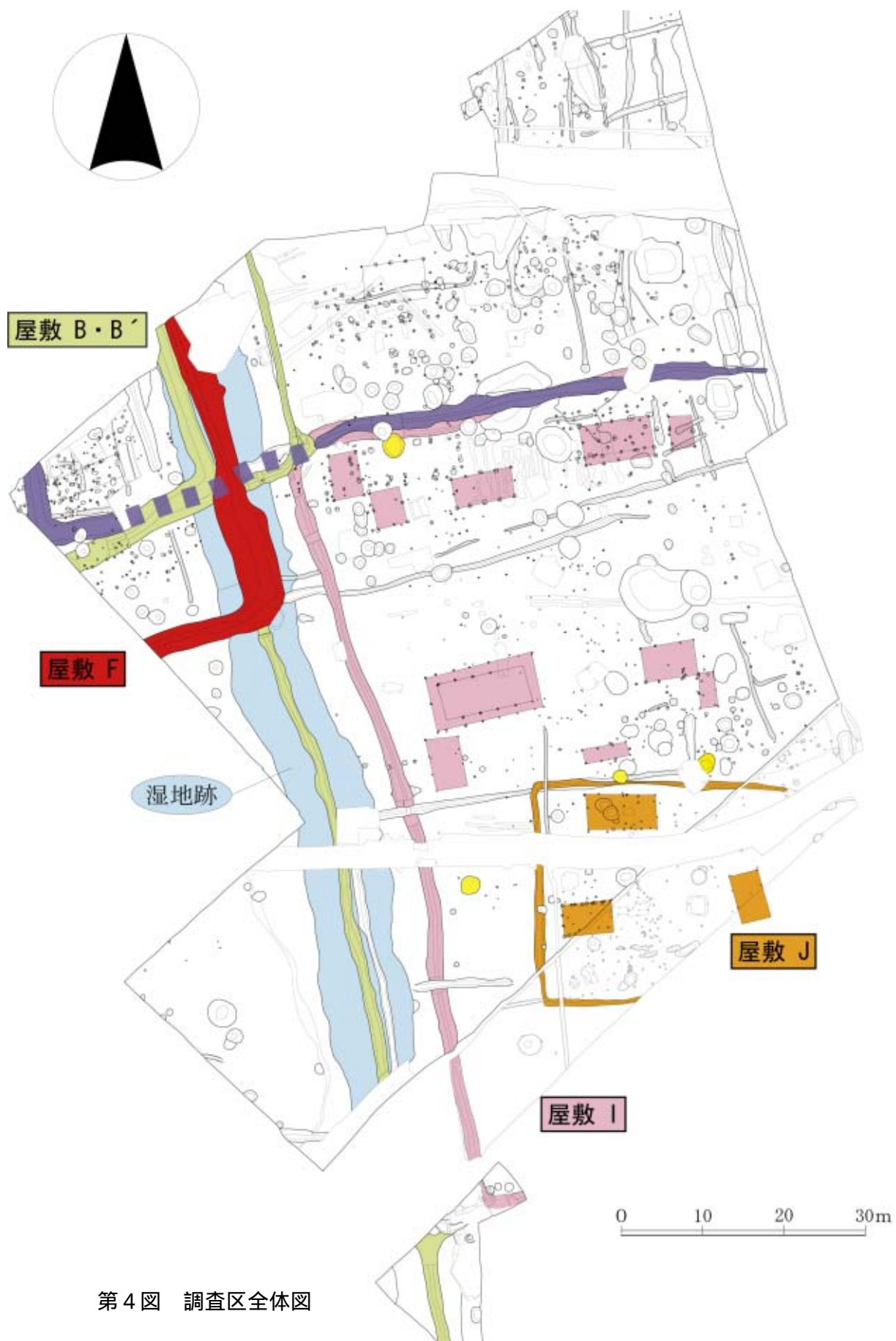
敷内部の位置からみて主屋南東にある^{そうのや}副屋と考えられます。

大溝跡から陶磁器・漆製品・木製品・動物の骨・植物の種などが出土しました。

〔屋敷F〕

第一期の屋敷跡です。まわりを幅3mの大溝で囲まれており、規模は東西50m、南北63mあります。内部から副屋とみら

れる建物や井戸などを発見しました。副屋は何度も建替えられています。



第4図 調査区全体図



第5図 屋敷Iと屋敷J

井戸跡や大溝跡から土器・陶磁器・漆製品・木製品・動物の骨・植物の種などが出土しています。とくに屋敷を巡る大溝の南東隅付近から多く出土しました。

【屋敷Ⅰ】

まわりを幅1mの溝で囲まれており、規模は東西60m以上、南北95mと考えられます。内部は西端中央に主屋とみられる^{ひさし}庇または^{えんがわ}縁側が付く建物があり、北端付近は小型の建物が多く認められます。井戸は主屋の東側に多くつくられました。時代については、現在検討中です。

【屋敷Ⅱ】

まわりを幅1mの溝で囲まれており、規模は東西30m以上、南北25mあります。内部は西端南よりに主屋とみられる建物があり、北端付近には小型の建物が認められます。井戸は主屋の東側につくられました。時代については、現在検討中です。

【出土遺物】

遺構や遺物包含層(=ゴミ捨て場)からは、^{うるしぬ}焼物や漆塗りの食器、^{うるしぬ}焼物や木・石・金属で作った道具類が出土しており、当時の人々のくらしぶりについてある程度知ることができました。ここでは、出土量が多い第Ⅰ期(鎌倉・南北朝時代)と第Ⅱ期(江戸時代)、それに3年前の調査で出土した第Ⅲ期(平安時代末期)の遺物をみてみます。

【第Ⅲ期：平安時代末期】

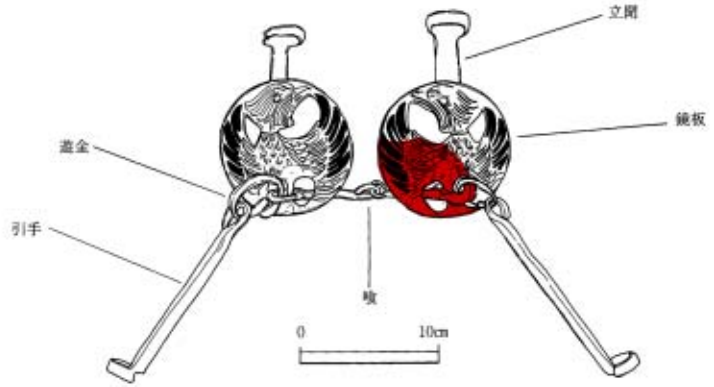
北部の遺物包含層から素焼きの土器(以下、かわらけといいます)・国産陶器・中国産磁器・漆塗り製品(椀・皿)・木製品(櫛・下駄・曲物容器・柄杓・箸・折敷・篋・櫛)・石製品(砥石)・金属製品などが出土しました。

かわらけは、ロクロづくりと手づくねの2種類があり、形は皿が大部分でそれぞれ大・小があります。ロクロづくりは、東北地方の伝統的な技術ですが、手づくねは12世紀中頃に京都から新たにもたらされた技術です。両者を較べると、製作技術だけでなく、色や器をつくる際の粘土も異なっていました。ロクロづくりの中には数が少ないですが、高い脚が付く皿(柱状高台)もあります。国産陶器は、愛知県の常滑産や渥美産



第6図 焼物の産地(『柳之御所資料館常設展示図録』を一部改変)

のものがああります。中国産磁器は白磁・青磁・青白磁が認められます。東北地方の平安時代末期の遺跡で手づくねかわらけ・常滑産や渥美産陶器、中国産磁器がセットで出土するところは、平泉藤原氏との結びつきが強かったと考えられています。



平泉町 志羅山遺跡・轡

※中野高柳遺跡では、赤く塗った部分が出土しました

てつじどうぞうがんかがみくつわ

象嵌鏡轡 (右上 縮尺 1/2) とその類例

こうした関係を示すものとしては、ほかに鉄製の轡くつわがあります。轡とは馬を操るため口にくわえさせる金具で、口の脇を飾る「鏡板」とくわえる部分の「喰」かがみいたが出土しました。鏡板は鑿のみでくぼめた部分に銅を埋め込み、羽を広げた鳥を表現しています。これと似たものは、京都や平泉町志羅山遺跡しらやまで出土していますが、鑿の先端の形や金メッキの有無などに違いがあり、本遺跡のものは平泉と同じ製作技術でつくられています。焼物の特徴や特殊な技術による轡の存在から、中野高柳遺跡に屋敷を構えた人物は、平泉藤原氏と関係が深かったと考えられます。

〔第 期：鎌倉・南北朝時代〕



屋敷G・G と遺物包含層からかわらけ・国産陶器・中国産磁器・漆塗り製品(椀・皿)・木製品(下駄・曲物容器・箸・横槌・小刀の鞘・戸車)とくるま・石製品(砥石)・金属製品ほうちょう(包丁・鍋・小刀・釘)などが出土しました。かわらけは、第 期と同じくロクロづくりと手づくねの2種類がありますが、粘土は同じものを使用し、色も似たものになります。また、手づくねは小

皿が中心となります。国産陶器は、常滑産や渥美産のほか、地元の白石産や愛知県瀬戸産せと、日本海側の窯の製品などがあります。中国産磁器は白磁・青磁・青白磁が認められます。本

遺跡の特徴として、国産陶器は地元製品より常滑産が多い点があげられます。

〔第 期：江戸時代〕



写真7 籠編物出土状況 (S E 2219 井戸跡)

屋敷Fとまわりの大溝から素焼きの土器(灯明皿)・燻焼きの土器(播鉢)・国産陶磁器・漆塗り製品(椀・皿)・木製品(櫛・下駄・曲物容器・箸・農具?)・竹製品(籠編物)石製品(砥石)・金属製品(キセル・釘)などが出土しました。陶器は愛知県や岐阜県産のものに混じって福島市岸窯の製品が認められます。下駄は、

足をのせる台部と歯が同じ木からつくられるもの(連歯下駄)と別につくられるもの(差歯下駄)とがありました。



ロクロかわらけ椀(第 期)



ロクロかわらけ椀(第 期)



台
(第 期)



手づくねかわらけ皿(第 期)



ロクロかわらけ小皿(第 期)



常滑三筋壺(第 期)



白磁碗(第 期)

青



漆器椀(第 期)



(縮尺 1/3)



連齒下駄（第 期 縮尺 1/3）



櫛（第 期 縮尺 2/3）

第 9 図 出土した下駄と櫛

4. まとめ

発見した遺構は、大きくみて平安時代の畑跡と鎌倉時代から江戸時代の屋敷跡に分けられます。

平安時代の畑跡は、遺跡中央を南へ流れる河川跡の東西で認められます。畑は、河川に連結する溝で三方を「コ」の字状に囲まれた内部に作られており、畝は河川に対して直交するようにつくられました。耕作面積は、遺跡全体で30,000㎡を超えます。年代は9世紀末～10世紀前葉とみられ、灰白色火山灰が降るといふ災害により、耕作を止めたことがわかりました。

鎌倉時代から江戸時代は、遺跡内で場所を変えながら屋敷がつくられました。屋敷は、幅3mの大溝で方形に区画され、内部には建物や井戸・土坑（穴）などがありました。それぞれの施設はつくられる場所が異なっており、屋敷内の使われ方が固定的かつ継続的であったと考えられます。

屋敷の外側にある幅1mほどの溝で囲まれた小さな区画は、屋敷の主と主従関係にあった人々や一般農民、道具をこしらえた職人などの住まいとみられます。武士の屋敷（館）のまわりには、こうした小区画をともなう住まいが集まり、これらが一体となって一つの集落を形成したと考えられます。

遺構や遺物包含層（ゴミ捨て場）からは、焼物や漆塗りの食器、焼物や木・石・金属で作った道具類が出土しており、それらを使用した人々の生活の様子についてある程度知ることができました。とくに13世紀から14世紀の出土品は、3年前に調査した12世紀（平泉藤原氏の時代）の出土品とともに、宮城県内では資料の数が少ない時代のものであり、たいへん貴重です。

来年度に予定している中野高柳遺跡の発掘予定面積は約3,000㎡で、これに今年度までの面積を加えると、じつに遺跡の94%を調査することになります。12世紀～16世紀代の遺跡をこれほど発掘した例は全国的にみてもあまり例がありません。このため、本遺跡の成果は在地領主のくらしぶりを古代末期～中世を通して具体的に検討できる貴重な資料といえます。

中野高柳遺跡関係年表

時代	西暦	和暦	宮城県のできごと	国内のできごと	遺跡
平安時代	869	貞観11	陸奥国に大地震が起こり、多賀城の建物が倒壊し、城下は津波が押し寄せる。水死者は1000人にのぼる	(850)出羽国で大地震起こる (859)藤原良房、人臣で初めて摂政となる	期 期 期 期 期 期 期 期 期 期
	870	貞観12	陸奥国修玉町を以て、多賀城の復興を開始する(弟館)	(866)応天門の変が起こる (878)出羽国の俘夷、反乱する(元慶の乱) (888)藤原基房、人臣で初めて関白となる (898)遣唐使の派遣を中止する	
	934	承平4	—この頃、灰白色火山灰が降下する— 陸奥国分寺の七重塔が落雷で焼ける	(935)承平・天慶の乱が起こる	
	1051	永承6	前九年の役が起こる(～1062)	(1016)藤原道長、摂政となる	
	1083	永保3	後三年の役が起こる(～1087)	(1053)平等院鳳凰堂が落成する (1086)白河上皇、院政を始める	
	1105	長治元	藤原清衡が平泉中尊寺を建立する	(1156)保元の乱が起こる	
	1143	康治3	多賀国府の名が初めて見える(『台記』)	(1159)平治の乱が起こる (1167)平清盛、太政大臣となる	
	1170	嘉応2	藤原秀衡が鎮守府将軍になる	(1180)源頼朝、伊豆で兵を挙げる	
	1177	治承元	角田市高蔵寺阿弥陀堂が再建される	(1185)壇ノ浦の戦いで平氏が滅びる	
	1181	養和元	藤原秀衡、陸奥守となる	(1192)源頼朝、征夷大将軍となる	
1186	文治2	諸国に守護、地頭が置かれる	(1221)承久の乱が起こる		
1189	文治5	源頼朝が奥州藤原氏を滅ぼす。葛西清重が陸奥国御家人の奉行を命じられる	(1232)御成敗式目が制定される (1274)蒙古が来襲する(文永の役) (1281)蒙古再び来襲する(弘安の役) (1333)鎌倉幕府が倒れる		
1190	建久元	伊沢家景が陸奥国留守職になる	(1336)足利尊氏、建武式目を定める(室町幕府の成立) 後醍醐天皇、吉野へ移る(南北朝時代の開始)		
鎌倉時代	1259	正元元	この頃、法身禅師が松島円福寺の住職となる	(1338)北朝が足利尊氏を征夷大将軍に任命する	
	1333	元弘3	北畠顕家が陸奥守となり、義良親王らとともに奥州に下向する	(1351)観応の擾乱が起こる	
	1336	建武3	北畠顕家、鎮守府将軍として多賀国府に再び下向する	(1392)南北朝の分立が終わる	
	1345	興国6	吉良貞家と畠山国氏が奥州管領として多賀国府に下向する	(1467)応仁の乱が起こる(～1477)	
	1351	正平6	畠山国氏、吉良貞家と府中、岩切城で戦い、敗死する(岩切城合戦)	(1543)ポルトガル船が種子島に鉄砲を伝える (1549)ザビエル、キリスト教を伝える	
	1377	天授3	余目持家と伊達政宗が一揆契約を結ぶ	(1573)織田信長、室町幕府を滅ぼす (1585)豊臣秀吉が関白となる (1590)豊臣秀吉が全国を統一する	
室町時代	1392	元中9	陸奥・出羽両国が鎌倉府の支配下に入り、奥州管領制が廃止される	(1600)関ヶ原の戦いで東軍が西軍を破る (1603)徳川家康が江戸に幕府を開く	
	1522	大永2	伊達植宗が陸奥国守護となる	(1615)大阪夏の陣が起こり、豊臣氏が滅ぶ 幕府、武家諸法度と禁中並公家諸法度を定める	
	1536	天文5	伊達植宗、『塵芥集』を制定する		
	1542	天文11	伊達植宗、子の晴宗と戦う(天文の乱)		
安土桃山時代	1567	永禄10	伊達輝宗の子(のちの政宗)が米沢城で生まれる		
	1589	天正17	伊達政宗が会津の芦名義広を攻め滅ぼす		
	1590	天正18	伊達政宗、小田原の豊臣秀吉の下に参陣する		
江戸時代	1603	慶長8	仙台城がほぼ完成する		
	1608	慶長13	伊達政宗、符半舟をより松平の姓を賜り、陸奥守となる		
	1613	慶長18	遣欧使節支倉常長ら180人が月ノ浦を出帆する		
	1615	元和元	支倉常長、イスパニア国王、ローマ法王に謁見する		

第 期から第 期の年代は、現時点での理解であり、今後修正される可能性があります。
1330～1392年の和暦は、南朝の年号を採用しています。